

ヴィトゲンシュタイン エンゲルマン 論理学
 平面計画 シンメトリー ウィーン

1) 本論の目的

ヴィトゲンシュタインが設計をおこなったストンボロー邸には、ドアの配置によって生成された各部屋壁面のの左右対称性、ホールの多数の両開きドアに組み付けられたドアハンドルの左右方向性の秩序、主階平面に見られるホールを中心とする強いヒエラルキーの存在など、空間構成に関する特徴がある^{注1)}。なかでもホールに接続する「朝食室」「居間」「サロン」「食堂」の4つの部屋に対して左回りに与えられたドアの数「1・2・3・4」の数列の配置は顕著である。この数列がどのような経緯で作らされてきたのかということに関しては不明であるが、本論では先行してこの建築の設計を進めていた共同設計者 P.エンゲルマンのスケッチと図面、そしてヴィトゲンシュタインが設計に参加して厳格な施工管理をおこなった後の実際の建築とを比較することにより、その経緯の一部を明らかにすることを目的とする。

2) エンゲルマンの平面図1 スケッチ

施主であり姉のマルガレーテ・ストンボローと友人のエンゲルマンからの誘いを受け、ヴィトゲンシュタインがこの建築の設計に加わったのは1925年12月末である。エンゲルマンは11月初旬に夫人から設計依頼を受け、それを同月27日にヴィトゲンシュタインに報告、その返事の手紙でヴィトゲンシュタインは年末から年始にかけてウィーンに戻ることを記している。すなわちエンゲルマンは、ヴィトゲンシュタインの参加以前に、少なくとも約2ヶ月間は単独で設計を進めていた可能性があり、この間にどこまで設計が進んでいたのか、また本論で問題とする数列に関するアイデアがどの時点で現れたものなのかは不明である。

一方で最終段階に近い空間配置を確認することのできるエンゲルマンの図面(次頁、図6)には1926年5月18日の日付が記載されており、ヴィトゲンシュタインが参加してから約5ヶ月間の間に平面配置の構想がほぼまとまったものと考えられる^{注2)}。エンゲルマンはこの図面以前にいくつものスケッチを描いているが、スケッチ(図5)と図面とを比較することで前述の数列に関する経緯を推測することが可能である。

竣工した建築との最も大きな差異はスケッチに記された部屋の用途である。サロンとなった部屋はスケッチで

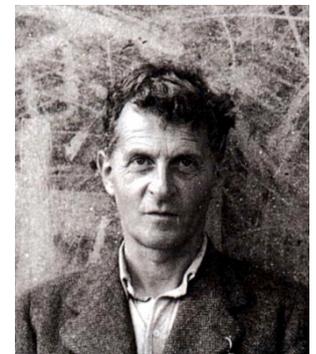


図1、左) ストンボロー邸 (1928年竣工)
 図2、右) L. ヴィトゲンシュタイン (1889-1951)



図3、左) 主階の部屋配置図
 図4、右) ホールを中心として左回りに配置された「朝食室」「居間」「サロン」「食堂」に与えられた数列

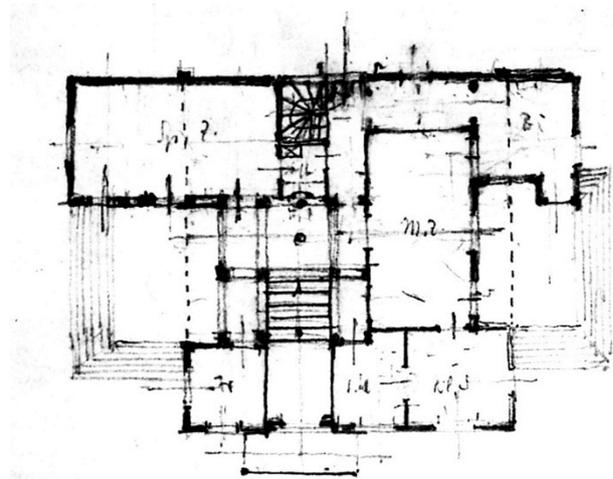


図5) エンゲルマンのスケッチ
 エントランスの軸線を中心に朝食室とそれと同形同寸の部屋がこれと左右対称に配置されていることが特徴。食堂の開口部の数は3であり、これによりホールを中心とした「1・1・3・3」の数列となっていることがわかる。

は音楽室、夫人居間は図書室とされている。一方居間となった部屋はスケッチでは2部屋に分割されており、図面左側の部分は夫人寝室、右側が夫人サロンの機能を与えられている。夫人寝室はエントランスの軸線を中心として左右対称形に、朝食室と同じ形状・同じ大きさの部屋として配置されていることがわかる。また注目すべき点は、食堂のテラス側開口部の数が3つであること、すなわち3という数字がこの部屋に与えられていることがわかる。これらのことから、スケッチ（図5）からは「1・1・3・3」の数列の確認が可能である。

3) エンゲルマンの平面図2

スケッチの空間配置に対して右の平面図（図6）の大きな違いは、部屋の2分割が解消され1部屋となり、内部壁面には2つの左右対称な開口部の配置が確認されること、そして食堂の開口部数は4となっていることである。これにより、数列は「1・2・3・4」となり、竣工された建築と等しい数列が平面構成に内在するようになったことがわかる。しかしながら後に居間となる部屋にはふかし壁による曖昧性が未だに残る。ホールにも円柱など装飾的なディテールがあり、エントランスからの軸線にも古典主義的な左右対称性が認められる^{註3)}。

これに対して、最終的な建築（図7）では多くの不明瞭な要素は整理され、平面図上の数列「1・2・3・4」が明快に現れている事がわかる。この操作は、他のエンゲルマンのスケッチにも存在していた装飾的な要素がヴァイトゲンシュタインによりことごとく排除されたのと同じ意図を持つものであると考えられる。壁とそこに配置されたドア以外の表現エレメントは殆ど消去されている。装飾的なエレメントの排除という意図とは逆に、ドアの数に数列という秩序を与えるという空間計画の考え方が一体どの段階で、また二人のどちらによって発想されたものであるかは不明であるが、平面図の中には少なくとも2種類の数列の存在が確認され、それらの関係が整理されていった様子が確認される。

4) まとめ

ストンボロー邸の主階にはドアの配置によって生成された左右対称性をもつ多くの壁面が存在する。そのことがこの建築の大きな特徴となっていることは明らかであるが、それらの壁面の配置には一定の秩序が存在していると考えられる。本論で述べた数列はそうした秩序の一つである。エンゲルマンのスケッチと図面から古典的な左右対称性を持つファサードが最終的には消滅するなど、計画が進むに従って様々な秩序の関係が整理されていった経緯が図面からも確認することができる。

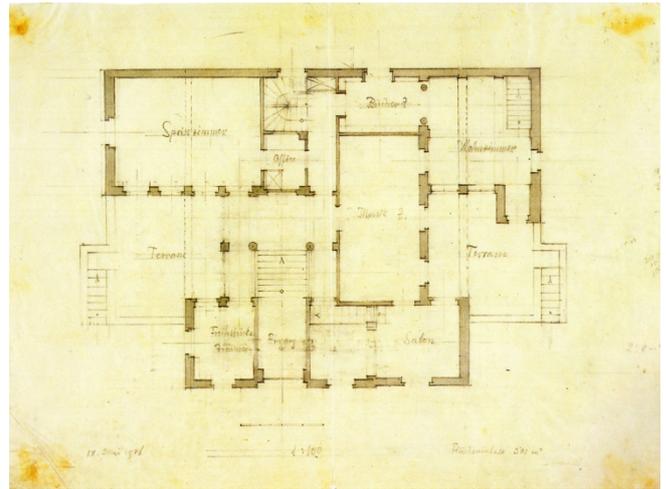


図6) エンゲルマンの平面図（1926年）

装飾的な内外のふかし壁や円柱などの形態エレメントが確認される。部屋のプロポーションが変わり、数列は「1・2・3・4」に変更されている。

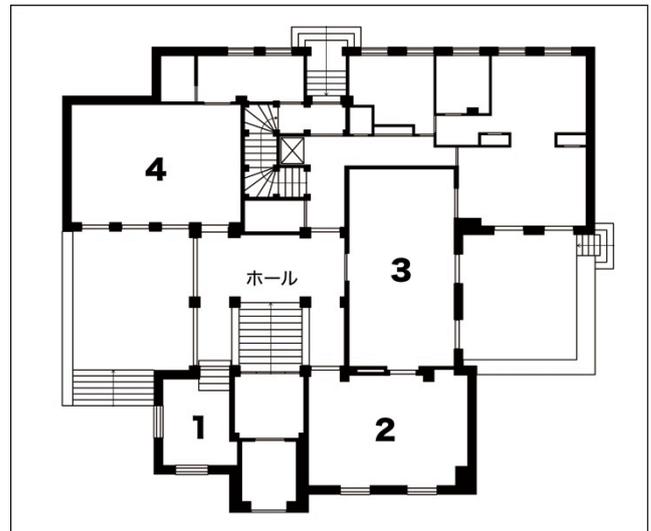


図7) 竣工した建築（1928年）の平面図

朝食室が小さくなり、ホールを中心として4つの部屋は、数列と左回りの秩序のもとに配置されている。

注

- 1) 「ストンボロー邸のドアとドアハンドルについて」、小山明、建築学会大会梗概集、2016年
- 2) エンゲルマンの多くのスケッチに関してはP. Wijdeveldが整理をしているが、制作された日付の特定できないものも多い。
- 3) 「ストンボロー邸の二種類の平面図について」、小山明、建築学会大会梗概集、2014年

図版出典

- 図1) 筆者撮影
- 図2) R. Rhees, *Recollections of Wittgenstein*, 1984
- 図3) 4) 7) 筆者制作
- 図5) 6) P. Wijdeveld, *Ludwig Wittgenstein, Architekt*, 1994